EF-4-4

PBLチュートリアル教育プログラムの現状と取り組み

○新田　淳美[1]，高倉　喜信[2]，赤池　昭紀[2]，入江　徹美[3]
[1]富山大院薬，[2]京大院薬，[3]熊本大院薬

模擬患者（standardized patients, simulated patients (SP)）養成及び課題立脚型学習（problem-based learning (PBL) ）チュートリアル教育プログラムの開発・導入により、教育効果を高めることを目的とし、担当校（京都大学（学部教育・リーダー校)、熊本大学（大学院教育・リーダー校)、富山大学）が取り組んでいる。本年度は、１）医学部などの他学部および附属病院と連繋した SP 養成や PBL チュートリアル教育の現状、２）各大学の PBL プログラムで用いているシナリオの内容、について、国立大学法人薬学部を対象に調査を行った。その結果、多くが医学部や看護系学部の連繋したプログラムを実施しており、ワークショップや実習を共同で行っている例もあった。また、各大学が作成・使用している PBL のシナリオも集めることが出来たことから、これらの情報を共有することで、より良い薬剤師養成教育へ寄与できると考えられる。一方で、これらの PBL 教育を行うためには、多くの人的・物的資源ならびにカリキュラムの柔軟性が必要であるという意見も寄せられ、今後の課題についても明確にできた。これらの結果を紹介し、先導的薬剤師養成における PBL 教育の充実に役立てたいと考えている。